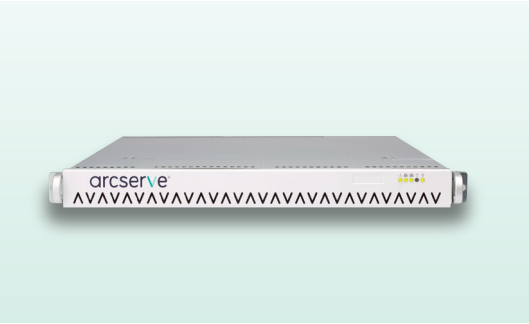
バックアップ環境の統合で数百万円ものコストを削減

ライセンスフリーのArcserve UDP 7300 Applianceがもたらす効果



ユーザプロフィール

業　種：小売業
会社名：株式会社ドン・キホーテ

ドン・キホーテ

課題

物理環境で稼働している十数システムは、データ保護体制がシステムごとに異なり、その運用も個別に行われていた。バックアップの確認に、毎日数十分単位の時間が割かれている状況の中、同社としては複数のバックアップソフトウェアが存在していること、運用の属人化とレベルのバラつきがあることに大きな問題を感じていた。

経緯

おりしも資産管理システムがリプレース時期を迎えた。いままでバックアップに5時間もの時間を必要とし、ときには異常終了することがあった。リスクを抱えたままの運用が続くことに同社は危惧し、これを機にバックアップソフトウェアを抜本的に選定し直し、物理環境すべてのデータ保護を統合しようと方針を固めた。

導入

情報システム部は複数の候補から、OSやDB対応、コストパフォーマンスでArcserveブランドに絞りこみ、最終的にArcserve UDP 7300 Applianceを選択した。その理由は、運用とストレージ統合を図ることが可能だったからだ。しかも、対象システムが増えても追加ライセンスは不要で、コストをかけずにデータ保護統合環境の実現が可能だった。

効果

5時間もかかっていたバックアップ時間が25分に激減、バックアップ確認作業が瞬時に完了するなど、多くのメリットが実感されている中、最大の効果はコスト削減だ。今後はシステム構築の度に、バックアップ環境を用意したり、設計作業を行わなくてすむため、同社では将来的に数百万円もの節約が可能であることを確実視している。

課題

個別最適で課題を抱えていた物理環境のデータ保護体制

"驚安の殿堂"で知られる小売店といえば、ドン・キホーテだ。コンビニエンス+ディスカウント+アミューズメントの三位一体を店舗コンセプトとし、食品、日用品をはじめ、雑貨、衣料品、家電製品、ブランド品、バラエティグッズまで、店内に商品が所狭しと陳列されている。見てまわるだけで楽しく、ショッピングがレジャーであることを再認識する空間だ。ドン・キホーテグループは2016年6月現在、日本国内および米国に計341店舗が展開されており、その中核となる株式会社ドン・キホーテ（以下、ドン・キホーテ）は、今や一大流通企業へと発展し続けている。ここまで成長した背景には、同社が自らを"変化対応業"と位置づけ、生活者ニーズの変化を機敏に察知し、それに迅速に対応してきたことがある。

ドン・キホーテは、情報システム構築においても独自のスタイルを築いている。顧客に安価な価格で商品を提供する小売業であることからコストを精査、ベンダーやシステムインテグレータに大きく依存することなく、情報システム部自らが主導権を握って迅速に動く。ドン・キホーテではここ数年プライベートクラウドの活用を積極的に進めており、そこで数百に上る仮想化システム統合を運用している。データ保護のために統合ストレージを導入、一元化を成功させた。

株式会社ドン・キホーテ
オペレーション統括本部
情報システム部
企画課
竹内 将徳 氏

その一方で、ドン・キホーテには物理環境のシステムも12、合計40台近いサーバが存在する。システムの導入に合わせて、その都度、データ保護環境も構築してきたため、ネットワーク接続も含めてシステムごとに環境が異なり、バックアップソフトウェアも複数存在していた。複数人の担当者がそれぞれ幾つかのシステムを受け持つため、バックアップの確認に毎日数十分単位の時間を割かなければならなかったうえ、エラーが出た際には、対象となるバックアップシステムのマニュアルにある対処方法を調べなければならなかった。

経緯

資産管理システムのリプレースを機に、物理環境のデータ保護変革に着手

このような物理環境のデータ保護は、統合された仮想環境のそれと比較すれば見劣りするものだった。情報システム部トップから「こちらにもメスを入れてはどうか」という示唆もあり、同部は本格的に物理環境のデータ保護の変革に動き出した。

おりしも、物理環境にある資産管理システムがリプレース時期を迎えることになった。同部は、このシステムのバックアップソフトウェアに以前から問題を感じていた。というのも、1.4TBのデータをバックアップするのにユーザー利用の少ない深夜帯から開始して5時間もかかり、ときにはエラーで異常終了することがあったからだ。ユーザーが利用する時間帯でのバックアップリトライは長時間にわたり対象システムのパフォーマンスに影響をあたえる懸念があるため、やむを得ず前日のバックアップをあきらめることもあったという。このまま、今後もバックアップデータが取得できないリスクを抱えて運用することを同部は危惧していた。また、ハードディスクが多重で壊れデータがすべて消えてしまったことがあったが、イメージバックアップに対応していなかったため、リストア作業が非常に面倒だったこともあった。この機会にバックアップソフトウェアを抜本的に見直し、今後は物理環境すべてのデータ保護をそれに統合しようと方針を固めたのである。

導入

運用とストレージ統一のメリットを評価したArcserve UDP 7300 Appliance

それではその製品をどう選ぶか。同部は代表的な製品を 5 つ挙げ、以下の観点から比較した。①Windows および Linux

といった同社システムのインフラ OS に対応しているか ②データベースのオンラインバックアップ機能は十分か ③コストパフォーマンスは高いか、といった点である。また、リストア作業を効率的に行うことができるイメージバックアップに対応した製品であることも必須要件となった。その結果、最小限の投資で最大の効果が得られると判断されたのが、バックアップ/リカバリソフトウェア Arcserve UDP だった。そして、システムインテグレータから具体的な提案を募る中で、バックアップ専用サーバ Arcserve UDP 7300 Appliance（以下、Arcserve UDP Appliance）の存在を知り、同部の考えは一気にそちらへ傾いた。その理由を株式会社ドン・キホーテ オペレーション統括本部 情報システム部 企画課 竹内 将徳氏は次のように語る。

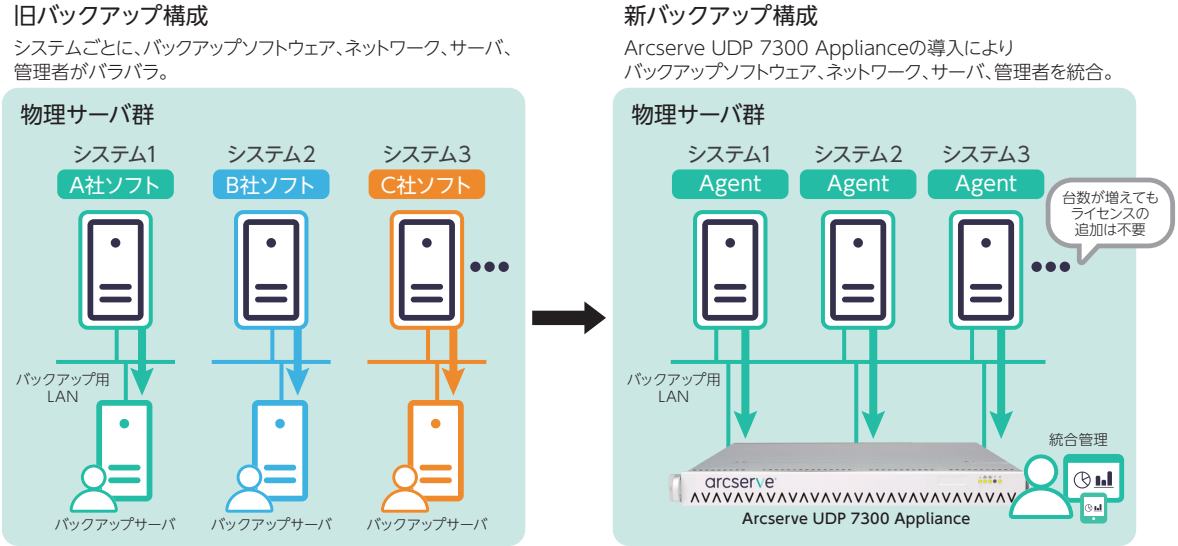
「当初はバックアップソフトウェアを一つにまとめることで、社内のバックアップ運用を一元化できたらいいと思っていました。Arcserve UDP Applianceなら、それに加えてストレージまでも一元化できますので、これまでのようにシステムごとにストレージやネットワーク機器を用意する必要がなくなります。しかも、アプライアンスに搭載されている12TBのデータ容量までであれば、システムやデータ容量が増えても追加ライセンスは不要であるため、資産管理システムのみならず、物理環境にあるシステムは、今後リプレースのタイミングでコストをかけずにこれに統合していくことができます。また、操作性も良く、いちいちマニュアルを開いて調べることも減ると思います。保守についても、これまで部分的にしか対応してもらえず、社内で対応しなければならない部分もありましたが、今後は開発元であるArcserve社に一括してお願いできるので、まさにこれが最善の解決策だと思いました」

効果

データ容量増加にもかかわらず、日次バックアップが5時間から25分へ

2016年4月、同部は予定どおり資産管理システムをリプレース、その後、他に1システムのバックアップ環境を追加し、現在2システム7サーバのデータ保護をArcserve UDP Applianceで行っている。また、これを機にシステム担当者ではなく運用監視チームが一括して日々のバックアップ運用を担う体制を整えた。リストアに関しては移行前に竹内氏自身が試してみたが、ウィザードの指示どおり進めていけば問題なくデータを戻せることが確認でき、このプロセスに対する不安は払拭できたという。

株式会社ドン・キホーテ様
Arcserve UDP 7300 Appliance 構成イメージ



リプレース後、資産管理システム上のデータは1.4TBから3TBへ増加したが、それにもかかわらず、日次バックアップ時間は5時間から25分へと激減した。というのも、Arcserve UDPでは、最初にフルバックアップを取得した後の2回目以降は増分バックアップのみで運用できるため、実際には日々60GBほどをバックアップ対象にすれば良いからである。25分で完了するのであれば、万が一、エラーが発生して日中帯にリトライを余儀なくされたとしても、短時間で完了する為、システムに与える影響を最小限にすることができる。「その安心感は大きい」と竹内氏は語る。Arcserve UDP Applianceに統合できたことで、これまでのようにバックアップの確認のためだけに、複数のシステムにログインする必要もなく、管理コンソールで全体を一瞬で把握できるため、作業時間の大幅な短縮が図れている。また、作業をシステム担当者から運用監視チームへ移管できたため、システム担当者は本業に専念できるようになった。

最大の効果は未来にわたって享受できる数百万円のコスト削減

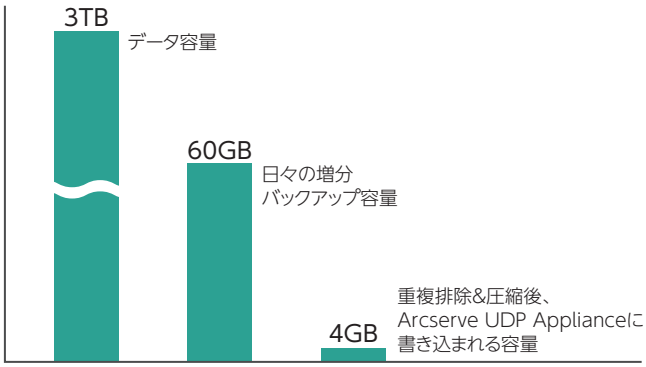
同氏はArcserve UDP Appliance導入の効果を次のように語る。

「いろいろメリットは実感していますが、中でも最大の効果はコスト削減です。システムごとにバックアップ環境を構築していた際には、1システムでシステム開発コスト並みの対価を求められることがありました。最近はサーバ、ストレージの価格が低下しており、その分安価に構築することもできますが、対象システムが十数となるとその掛け算はばかになりませんし、その都度、ソフトウェアライセンスの購入、ネットワーク機器の購入、システム設計、ネットワーク設計、システム設定といったコストや工数が発生します。その点、追加ライセンスフリーのアプライアンスは、1台でこれらすべてを担ってくれるので、今後も何も考えなくていい。結果的に数百万円単位のコスト削減を実現できると考えています」

同部はここに12システムの統合を予定。今後、各システムのリプレースのタイミングで順次移行していく。Arcserve UDPの継続的な増分バックアップや重複排除により、以前に比べてバックアップ容量を1/4まで圧縮できているため、それを上回る数のシステムをここでバックアップすることも可能と見ている。また、Arcserve UDPへの統一により、属人的なバックアップ運用を脱却し、物理環境全体のデータ保護レベルの底上げが可能になったことも大きいようだ。

同社において、データ保護の次なるテーマはBCP対策の強化や極めて重要度の高いファイルサーバのデータ保護となる。情報システム部では、今回のArcserve UDP Applianceへの統一をきっかけに、ドン・キホーテらしく創意工夫で課題を解決しようと引き続き知恵を絞っている。

ドン・キホーテの物理環境におけるバックアップ状況



すべての製品名、サービス名、会社名およびロゴは、各社の商標、または登録商標です。
製品の仕様・性能は予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。
Copyright ©2016 Arcserve(USA), LLC. All rights reserved.

Arcserve Japan

お問い合わせ

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング
Arcserve ジャパン ダイレクト 0120-410-116(平日 9:00～17:30)
JapanDirect@arcserve.com

Arcserve.com/jp 検索

WEBサイト:www.arcserve.com/jp
※記載事項は変更になる場合がございます。2016年9月現在